

# 「いきなり魚雷が！」

桂川町在住 Aさんの体験談

当時、二十歳だった私は、召集令状（※①）が届き、桂川から佐賀へ。そこで訓練を受けたあと、鹿児島から輸送船に乗り込みました。当時は、軍や上官の命令は絶対といった教育を受けていたので、命令に従うまま、なんとなく南方（今の東南アジア）方面へ行かされるのかなといった感じでした。輸送船には、千五百人位の兵隊が乗り込み三隻で日本を後にしました。

ひたすら南下し、赤道を越えたりだったか、いきなり爆発音とともに私の乗っている船は大きくゆれ、あつというまに沈没しました。それは魚雷による攻撃でした。

なんとか海面上に顔を出した状態で泳いでいた私が見た光景は悲惨なものでした。その後、太平洋の大海原で11時間漂い続け、救助の船に何とか助けられたのは、わずか三百人位でした。

たった一発の魚雷で千二百人の若者の命が海に消えました。それが私が体験した、私の記憶に残る忘れられない戦争です。

# 「飛び立ったまま」

桂川町在住 Bさんの体験談

終戦直前の一九四四年（昭和十九年）に乙種飛行予科練習生（※②）として入隊した私は、南鹿児島島の航空基地へ配属となりました。

戦争も終戦直前の末期の時。アメリカ軍の上陸に備え、海岸の水際に上陸を食い止めるために、腰に重しを付け、長い竹竿に爆弾に見立てた玉を付けた物を持ち、海に潜って上陸してきた船の底に当てる爆発、撃沈させるといった訓練などを日々行っていました。

また、戦艦大和による沖縄突撃が決まると、その援護のため、私が居た航空基地にも百数十機の飛行機が集結しました。当時は、兵器、物資も底をついていた状態だったため、胴体に空いた穴を木の板を打ち付けたような飛行機でも、飛べそうな飛行機は全て集められていました。そして、大和突撃の援護作戦決行の日。私や基地中の仲間、滑走路脇に並び、飛び立っていく飛行機に向かって軍帽を振り続けました。

それらのうち、一機として戻ってくる飛行機はありませんでした。

# 遺書

神風特別攻撃隊・丙種飛行予科練習生（福岡県出身・19歳）

母上様、長い間色々とお世話になりました。いさぎよく、敵空母に突込んで征きます。

皆々様、どうか御身体に充分注意されん事をお祈り致します。

出撃の朝

母上様・姉上様

昭和二十年四月・沖縄にて敵艦船攻撃戦死



## （※①）【召集令状（赤紙）について】

軍から各地の警察署に発送され、次に役場を通して直接、本人又は家族に手渡されました。原則として発送より48時間以内に指示された部隊本部に出頭しなければなりません。なお、当時成人男子の所在は、警察・役場などを通して軍の完全な管理下にありました。

## （※②）【飛行予科練習生について】

昭和5年に、海軍飛行予科練習生制度として発足し、当初は現在の中学3年生（14歳以上）～20歳未満で学力・体力ともに優秀な者を少年兵（飛行兵）として選抜・採用し、教育、訓練する乙種予科練習生制度ができました。

昭和12年には更に航空戦力の急速な拡充から大量の搭乗員が必要となり、現在の高校生（15歳以上）～20歳未満を短期間で養成する甲種予科練習生制度ができ、また海軍内の一般の兵の中から志願・選抜された者を丙種予科練習生と呼びました。

更に、昭和18年から乙種予科練習合格者のうち一定の資格を持つ者が乙種（特）予科練習生として採用され、短期教育を受けた後、第一線へと出ていきました。

| 海軍飛行予科練習種別 | 入隊者数     | 戦死者数   |
|------------|----------|--------|
| 乙種予科練習生    | 87,531人  | 4,984人 |
| 甲種予科練習生    | 139,730人 | 7,114人 |
| 丙種予科練習生    | 7,362人   | 5,454人 |
| 乙種（特）予科練習生 | 6,840人   | 1,348人 |